

自著と
その周辺

神様のカルテ, 神様のカルテ 2

著者 夏川草介

小学館
1巻 2009年8月刊行
208頁 1,260円
2巻 2010年9月刊行
320頁 1,470円

『自著とその周辺』というお題で、著書の紹介を書いてもらえないか、そういう依頼を小生が受けたのは、今から二年前の冬のことである。折しも、小説「神様のカルテ」が第十回小学館文庫小説賞という光栄きわまる賞をいただき、ようやく世に出始めたばかりのころ。いまだ先行きは不透明ではあるものの、名もない一新人作家の著作がその分をわきまえず、著者本人の遠慮も恐縮も無視して、世人の面前を往来するようになった頃である。

依頼に対する当時の返答は、「No」であった。もちろん驕慢ゆえの応答ではない。むしろ青息吐息で一冊の小説をようやく書きあげただけの若輩にとって、わざわざ信州医誌の紙面を割いて自らの作品を語るなど、重荷に過ぎて応じられなかっただけのことである。ゆえに失礼を承知でこれを固辞したが、それでも是非、とおっしゃって下さる声に対し、小生もつい一言「では、もし2巻が完成しましたなら」と軽薄きわまる応答をしてしまったのだ。

応じた時は2巻の完成など夢のまた夢。どころか、一年後に小説を書き続けているという確信もなく、目下の重大な心配事は、週末の県立木曽病院の当直の方であった。しかし、一年を過ぎてとにかくも2巻が完成してしまったのである。その名も「神様のカルテ2」。そのまんまじゃないかとのたまう旧友の呆れ顔を黙殺してこれを世に問うてみれば、読者の感想が届くより先に、「昨年お願いした本誌の小文の件ですが……」と本コーナー執筆の再依頼となったのである。一年前に「では5巻が完成しましたなら」とでも答えておけばかかる窮地に陥らずとも済んだものを、と悔やみつつ、約束は約束と潔く応じた次第であった。

いずれにしても「神様のカルテ」である。はっきり申し上げて、これは地域医療の困窮を訴えた医療小説などではけしてない。医者が足りないだの夜は眠れないだのという話は、わざわざ小生が語らずとも、信州で働く多くの諸先生方にとっては自明の理であろう。臨床医にとっては今更の感のあるこれらの事柄を、わざわざ声高に論ずるなど無粋と言うほかない。私がこの小説で描きたかったのは、そういった過酷な環境の中にあっても、絶望せず、むしろ颯爽と現場を駆け回る「人間」の姿なのである。題材が医療であったのは、小生の職が医師であり、八百屋の日常を描くよりはリアルに質感をもって描けると信じたからに過ぎない。

いまだ十年に満たない医師としての経験の中でも、小生は実に多くの魅力的な人に出会ってきた。師であり、友であり、ときに患者であり、その家族である多くの人々の姿は、未だに忘れがたい記憶とともに胸中にある。絶望と隣り合わせの状況においても、けして前進をやめない人間の姿。その素朴でありながら、尊厳を失わない姿に出会うにつけ、いつかこの風景をどこかに書き残しておきたいと考え続けていた。その思いが「神様のカルテ」の源泉なのである。かくして成った小説が、毎週通う本屋の店頭に並んでいるのを発見したときの驚きは、言葉では表しきれない。表しきれないものを無理に表そうとすれば、ほころびが生じるだけである。ゆえにただ「感無量」とのみ述べることにする。

「二足の草鞋」という言葉がある。「神様のカルテ」が、多くの人の目に触れる曙光を得てから、この言葉に接する機会が増えた。小学生のころの小生は、「一足がダメになっても、もう一足の草鞋があるから、どこまでだって歩いて行ける」という意味だと思っていた。そういう強引な解釈は、ある一面では成り立つのかもしれない。実際、作家と兼業をしていた人が、途中から作家専業に切り替えていくことはしばしば見られることである。しかし小生にとって「医師」という職業は、少々擦り切れてきたからといって履き捨てることのできるものではない。むしろぼろぼろになってもこの一足でどこまでも歩くつもりである。ただもう一足の草鞋があれば、医師の道からは見えない別の風景とも出会うことができるかもしれない。二足の草鞋を少しずつ履き古しながら、この美しい信州の町々を歩きめぐっていきたい。一内科医の密やかな夢なのである。